激動の幕末・明治維新史科

第22回 講義 西南戦争と西郷隆盛 （原田先生）

1班 広報担当 2023年1月31日

西南戦争前夜の日本の様子と西郷隆盛に対する評価について講義していただきました。

（1） 明治六年政変後の政府について

＊「台湾出兵」
西郷・板垣らの主張する征韓論を抑え込み「富国強兵」を進めるはずだった新政府の大久保や大隈は、1874年（明治7年）に台湾征討を閣議決定した。木戸孝允はこれに反発し職を辞した。
貿易相手として日本より清国を重視していた英米は日本の台湾出兵に強く反対した。日本は賠償金50万両を得て撤兵した。戦死者は12名だったが、マラリアによる病死者が561名に登った。
これを機に政商が誕生することになった。
[海軍の御用商人 三菱商会（岩崎弥太郎） 陸軍の御用商人 大倉組商会（大倉喜八郎）]

＊「江華島事件」
1875年（明治8年）日本の軍艦雲揚が江華島沖で挑戦より砲撃を受け交戦となった。1876年（明治9年）日朝修好条規を調印するが、これは朝鮮にとって不平等条約であった。これに対し下野していた西郷隆盛は「信義にもとる」と非難した。

＊「大阪会議」
征韓論の延期により西郷・板垣が辞職、台湾出兵に反対して木戸が辞職して政府の弱体化が懸念された。そこで1875年（明治8年）2月に五代友厚の斡旋で大阪北浜にて大久保・木戸・板垣が集まり政治改革について議論した。これを機に木戸・板垣が参議に復帰した。

（2）西南戦争前夜の状況
＊不平士族の反乱
明治維新後、「秩禄処分」「廃刀令」で士族の特権が無くなり士族の反乱が日本各地で発生
佐賀の乱（佐賀士族 江藤新平、島義勇）
神風連の乱（熊本県士族 太田黒伴雄）
秋月の乱（福岡県士族 宮崎車之助）
萩の乱（山口県士族 前原一誠）
＊農民の反乱
「学制」による高い学費、児童の労働力減少、「徴兵令」による成人の労働力減少、
「地租改正」による重税などにより、農民の反乱が日本各地で発生
＊士族民権派の台頭
「民選議院設立建白書」 明治維新後の新政府のやり方について、一部の政治家（大臣）が天皇を抱えて、政令をコロコロ変えたり、お友達政治を行ったりしており、これに対する不満が高まった。
新政府は、これらの反乱が一体化して拡大することを恐れていた。

（３）西南戦争

１８７７年（明治１０年）、士族の不満を背景に薩摩が動いた。

戦場は、熊本城⇒田原坂⇒人吉⇒可愛岳⇒城山と移ったが、九州を出ることは無かった。

城に残る戦争時の銃弾跡

戦場から出土した戦争時の銃弾

西郷が立てこもった城山の洞窟

南洲神社の墓地。薩軍 2023 名が眠る

（４）西郷隆盛について

＊西郷隆盛が西南戦争という反乱を起こしても、明治天皇は西郷を信頼しきっていました
＊明治天皇は、西郷に厳しく育てられ、西郷を信頼し、その死を深く悲しまれました
＊反乱を起こしたといっても、国民のだれもが西郷の清廉潔白は人柄を知っていました。

西郷隆盛の蜂起知った木戸孝允は、「西郷隆盛は悪人では無い。彼の行いは良くないが、政府も反省する必要がある。我々は東京に住んで常に政府と接しているがそれでも政府の行いには疑問が多く残る。まして鹿児島にいる西郷なら不満もあったであろう」と書いている。

西南戦争での西郷の死の知らせを聞いた明治天皇は、翌日、西郷の追悼歌会を開き、皇后以下女官たちへ「西郷隆盛」という題で和歌を詠むように命じました。その際、西郷隆盛の罪を入れることは禁じられたそうです。

薩摩潟しつみし波の浅からぬ　はしめの違い末のあはれさ（皇后陛下）

西郷隆盛は、死後わずか１２年で「逆賊の汚名」を返上しました。明治天皇の計らいでした。

鹿児島の西郷像（軍服）

私学校跡記念碑

明治７年～９年の士族の反乱

（５）原田先生のこぼれ話

＊憲法が出来て以降は、天皇陛下が閣議決定を覆すことは無かったが、「征韓論」の時は西郷を韓国に派遣するという閣議決定を岩倉具視の意見によって、延期に変更した。

＊陸軍の御用商人となった大倉喜八郎は教育機関の創設にも熱を入れ、
　大阪大倉商業学校（現：関西大倉中学校、高校）や大倉商業学校（現：東京経済大学）創設

＊山田顕義は日本法律学校の創立に関わり、日本大学の学祖とされている。

以上